

大学留学生に必要なディスカッションテキストとは

－既存のテキスト分析を通じて－

福原 香織

キーワード：大学留学生のディスカッション、テキスト、遂行意識、進行言葉

はじめに

ディスカッションは、コミュニケーション能力が重視されるようになった昨今、大学教育のさまざまな場面で採り入れられるようになった。大学で学ぶ留学生の日本語授業においても、ディスカッションは会話能力を伸ばすためのみならず、新たな教育目標をもつ重要な活動の一つとして再認識されている。語学教育の場でのディスカッションは、目標言語の運用能力向上を図ることはもちろん、論理的思考力を育み、課題の遂行・達成への方略を立ててその場で対応するなど、文面ではなかなか習得が難しいことを実践で学ぶことができ、さらにその過程で複数のメンバーとの関係性を構築していくという、大きな学習効果が期待できる活動である。しかしながら、少なくとも日本語授業に関してみると、果たしてディスカッションがどれほどの効果をあげているのか、さらに言えば、標榜する「コミュニケーション能力の育成」に込められた成果をもたらしているのか、疑問が残る。実際に日本語教育の現場教師からは、ディスカッションについて「何を指導すればよいかわからない」、「雑談になる」、「一人が演説し、他の学生は黙っている」、「各々が勝手に話し出したり、遮ったりして議論をコントロールできない」など、対処に悩む声が少なからず聞かれる。原因は、ディスカッションが個人の意見表明ではなくグループのメンバーが共通した目的を持って臨む意見交換の場であり、そのための具体的な「やるべきこと・やるべきではないこと」が、教師と学習者双方に共有されていないためではないかと思われる。さらに、留学生にとって全てを日本語で行うというハードルの高さが、教師側に（時に学習者側にも）いま一つ理解されていないように見受けられる。これらの諸問題を解決するには、何よりもまず、ディスカッションの意義や進め方から着実に学べるテキストが必要となるが、現在のところ、大学留学生を対象としたディスカッション専用のテキストは見あたらない。そこで、本稿は現在発行されている大学教育用テキストや日本語教育用テキストなどから、ディスカッションを扱っているものを10冊選定し、それぞれの分析を行った。現状のテキストで何を学ぶことができ、何を学ぶことができないのかを検討し、望ましい「大学留学生が使うディスカッション用のテキスト」とはどのようなものか、その基本的枠組みを提示することが本稿の目的である。なお、本稿のいう大学留学生とは、「日本の大学で学ぶ日本語中級後半～上級レベルの留学生」を指す。

1. 日本語授業におけるディスカッション

10冊の分析の前に、まずディスカッションとはどのような活動なのかを確認しておきたい。これまで日本語教育教材にディスカッション専用テキストが無かった理由は、ディスカッションの意義と目的が明確にされないまま、会話練習の延長上に、いわば「無造作に」位置付けられてきたためではないかと思われる。確かにディスカッションは、広義では「話し合い」であり、会話・対話の延長と見なされるのも無理はない。しかし、このように曖昧な理解では有意義なディスカッションとならないことは、冒頭で述べた。そこでまず、ディベート、会話・対話とディスカッションの違いを判然とさせ、その基本概念を明確にしておく必要がある。

1.1 ディベート、会話・対話、ディスカッションの違い

一般に、ディスカッションは「話し合い」あるいは「討論」と訳される。「討論」という語は、もともと明治期にディベートの訳語として用いられるようになったものだが、現在、ディベートと討論は明確に区別されている。また、討論について広辞苑をみると、「互いに議論をたたかわすこと、事理をたずねきわめて論ずること」とあり、この点で日常的な会話・対話レベルの「話し合い」とも区別されることは明らかであろう。つまり、ディスカッションはディベートとは異なるものであり、会話・対話レベルの話し合いでもない、ということになる。では、何をもってディスカッションと見なせばよいのか。

香月・福原（2022: 64）は、ディスカッションを、福原（2019: 45）の討論の認識「合意形成、意思決定、説得などにより妥当な結論を導くことを目的とした議論」に加えて、「意見交換やアイディアの共有といった結論を求めない話し合いも含む」とし、より包括的に捉えている。この香月・福原の言明は、実際のディスカッションの姿とそのイメージに合致しているように思われる。つまり、ディスカッションは「結論を導く」あるいは「意見交換やアイディアの共有」といった、何らかの「目的」を持った話し合いということである。（このことが、ディスカッションを成立させる要素に直接関与してくるのだが、詳細については第3章で述べる。）しかし、ディベートも論証をもって相手に勝つという明確な目的を持っているし、会話・対話にも、目的があると言えはる。また、ディスカッションには「話し合うべきテーマ」があることがしばしば指摘されるが、テーマならディベートはもちろんのこと、日常的な会話・対話でも大なり小なり設定され得る。したがって、目的やテーマの有無がディスカッションを他と区別する決定的な要件とはいえない。ディベート、会話・対話、ディスカッションそれぞれの本質を問う必要がある。

まず、ディベートとディスカッションの違いをみてみると、バーンランドとハイマン（Barnlund & Haiman）¹ は次のように述べている。

Debate is usually thought of as that kind of discourse which takes place, prior to a vote or ar-

bitration, between individuals who have fixed positions on a subject and who are trying to persuade others to accept their point of view. Discussion, on the other hand, is ordinarily considered to be a flexible, cooperative process which precedes settlement by consensus.

(Barnlund & Haiman 1960: 48 下線筆者)

下線部のように、ディスカッションは「合意に至るまでの柔軟で協力的なプロセス」であるという。ディベートは相手を説得して勝つことが目的であり、そのために自陣側の論理を構築し、表明することが本質である。また、エヴィデンスに基づいた各論を、進行に従って提示するという極めて形式的な過程を経る（樋口 2003 は、形式性・劇場性・ゲーム性の三つがディベートの特徴であると述べている）。しかし、ディスカッションはそうではない。「合意に至る」ことが目的であり、そこに至るには参加者自身がターンを廻し、発言と検討を繰り返すことが必然となる。そして、その過程（プロセス）は、「柔軟で協力的」でなければならない。また、「合意」は、意見交換やアイディアの共有などが目的の場合には、それを達成するという意味で「到達」としてよいと思われる。その場合でも、参加者たちの能動的な態度と、柔軟で協力的なプロセスが必然となることに変わりはない。これこそが、ディスカッションの本質といえるだろう。

会話・対話との明白な違いも、この辺りにあると思われる。会話や対話は（一対一でも複数でも）、互いの意思疎通や情報のやり取りがその本質であり、仮に何らかのテーマについて立場や考え方の違いがあっても、話し合いの方向性や終結の仕方は、当事者たちによって任意に決めることができる。したがって、そのプロセスも「柔軟で協力的」というより「自由」というべきものだろう。以上を簡単に纏めると、〔表 1〕のようになると考えられる。

〔表 1〕ディベート、会話・対話、ディスカッションの違い

	テーマ	本質	プロセス	立場	終結の仕方
ディベート	必要	説得のための論理構築	形式的	固定	勝敗
ディスカッション	必要	目的達成のための意見交換・検討	柔軟で協力的	変更可	合意、到達
会話・対話	任意	意思疎通 情報のやり取り	自由	自由	任意

このように、ディスカッションは広く「話し合い」という範疇では、ディベート、会話・対話とは容易に区別できない場合もあるが、その本質・プロセスの在り方・終結の仕方という 3 点において、他とは明らかに異なるものである。

1.2 大学留学生のディスカッション

以上、ディスカッションの基本概念を確認した。しかし、大学留学生が日本語授業でディ

スカッションを行うことを想定するなら、もう少し具体的で実践に沿った説明が必要であろう。そこで、次に大学初頭教育テキストである『知のナビゲーター』（中澤他、2007）第6章をみると、以下のように述べている。

「ディスカッションはグループによっておこなう双方向のコミュニケーションであり、その目的は、問題意識を共有して共通の理解を獲得したり、共通の解決策に到達したりする点にある。」（中澤他、2007: 120）

この言明は、大学教育でディスカッションを行うことの意義と本質を押さえたものであり、本章で議論してきたことも、これに尽きる。したがって本稿では、ディスカッションの基本概念を「柔軟で協力的なプロセスを経て、共通の理解を獲得し、共通の解決策に到達するという目的をもった話し合い」とし、大学留学生が行うディスカッションでもこれを根底に据えることにする。次に、これを実践するにあたって留学生には何が必要となるのかを、検討していかなければならない。

2. テキスト分析

2.1 分析の対象と方法

ディスカッションについて詳しく学べる単体テキスト自体が非常に少なく、プレゼンテーションのテキストが豊富にある状況と比べると著しい差がある。こうした現状で今回、本稿が分析対象としたのは、まず前提として①テキストの形式になっていること、次に、②大学教育または日本語教育で実際に使われている、あるいは使われた実績があるテキストであること、③ディスカッションそのものあるいはテキスト内で部分的にでもディスカッションを扱っていること、④比較的近年の発行で手に入りやすいものを選定基準とした。しかし、これだけでは資料数として十分ではないので、⑤「ディスカッション」ではなく「討論」や「話し合い」という用語を使っているが、テーマに即して話し合う活動を扱っているものも、参考程度に採り上げた。以上①～⑤の基準を元に選定したのが〔表2〕の10冊である。なお、ここでは便宜上、テキスト名・出版年・筆頭執筆者または編者のみと、各書の序文などで挙げられていた「主な対象」を記してある。共同執筆者、出版社などの詳細情報は、本稿末のリストを見られたい。

10冊の分析は、主として以下の5項目について説明があるか、また、どのような視点でどの程度説明されているか、どのようなテキスト構成になっているかなどを考察し、それぞれの特徴、利点、問題点として記述した。ただし、⑤については、日本語学習者が対象になっている日本語テキスト（表2の5～10）のみである。

①ディスカッションとはどういうものか（理念、目的、意義など）について

- ②ディスカッションの具体的な進め方
- ③コミュニケーション能力とディスカッションの関係性
- ④情報の収集、論理的思考の仕方
- ⑤どのような日本語口頭表現を使うか

〔表 2〕 分析対象テキスト

	テキスト名、出版年、著者名	主な対象
1	『話し合いトレーニング 伝える力・聞く力・問う力を育てる自律型対話入門』（2011）大塚裕子編著	大学生、社会人
2	『大学生からのグループ・ディスカッション入門』（2018）中野美香著	大学生
3	『知のナビゲーター』（2007）中澤務他編	大学生
4	『みんなのディベート授業』（2003）樋口裕子著	小学生、小学校教員
5	『中級 日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』（2012）黒崎典子編著	日本語中級学習者
6	『もっと中級 日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』（2013）黒崎典子編著	日本語中級～上級学習者
7	『日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』（2007）荻原稚佳子他著	日本語上級～上級以上の学習者
8	『日本語 口頭発表と討論の技術 コミュニケーション・ディベート・スピーチのために』（1995）東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編	大学留学生
9	『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーション プレゼンテーションとライティング』（2012）大島弥生他著	大学生、大学留学生
10	『新装版 実用ビジネス日本語』（第 6 版 2013）TOP ランゲージ著	中級以上外国人ビジネスマン

さらに、その目的と重点が置かれている内容の割合から、10 冊を大きく三つのタイプにわけた。一つ目は《人材育成型》（表 2 の 1～3）、二つ目は《日本語口頭表現能力伸長型》（同 5～10）、三つ目は《話し合いの基礎習得型》（同 4）である。以下で、三つのタイプごとに分類し、それぞれの分析結果を記す。

《人材育成型》

1. 『話し合いトレーニング 伝える力・聞く力・問う力を育てる自律型対話入門』（2011，大塚裕子編著）
大学生、社会人を対象とし、「自律的対話能力」を身に付けるという一貫したテーマを掲

げている。ディスカッションは“自律対話型プログラム”の一つであり、ディスカッションの訓練がコミュニケーション能力を伸ばすことであるとする。話し合いと振り返り・改善を繰り返し行い、互いを高め合う活動と位置付けている。本論、振り返りシートなどに分かれており、構成が複雑で扱いにくいことは否めない。また、理念や概念が高度で、適宜、講義時間を設けて説明を加える必要性が生じ、実践に結びつけるにはやや時間を要する。

2. 『大学生からのグループ・ディスカッション入門』（2018, 中野美香著）

テキスト形式でディスカッションのみを扱っている書としては唯一といえる。4部構成となっており、第1部でディスカッションのスキルと進め方が説明されている。他者から見た自己の理解、相手を受け入れることなどを学んだ後、グループ内での役割分担、テーマの理解の仕方、アイデアの広げ方、質問の仕方などが学べるようになっている。「話し合い」を、「始める」「膨らませる」「終える」3段階として構造化し、それぞれの段階を意識的に行うようになっているのは有用である。第2部は予習ワークシート、第3部はディスカッション・ノート、第4部はポートフォリオに当てられており、事前準備と振り返りも重視されている。構成が複雑でやや扱いにくい点、理念の理解のために講義等で補う必要がある点は、1と同様である。

3. 『知のナビゲーター』（2007, 中澤務他編著）

大学生活で身に付けるべき様々なリテラシーを学ぶ大学初頭教育用テキストで、ディスカッションは第Ⅱ部「コミュニケーション力をみがく」の第6章で扱われている。ディスカッションは「効率よく問題を解決する方法を理解する訓練」の一つとしており、そのための思考法やディスカッションの形式が、わかりやすく実践しやすい形で説明されているのが大きな利点である。大学生活におけるディスカッションの重要性、生産的なディスカッションの条件などの説明があり、特に有用なのは、「理解を深めるディスカッション」、「問題を解決するディスカッション」、「多人数で問題を共有するディスカッション」など、規模と目的に応じた適切なディスカッションの方法があること、KJ法などアイデアの整理の仕方を学べる点である。ただし、どうすれば議論をコントロールできるかなど、参加者の具体的な取り組み方については、ほとんど説明が無い。

《話し合いの基礎習得型》

4. 『みんなのディベート授業』（2003, 樋口裕子著）

著者が日本の小学校の「総合的な学習時間」で実践したディベート授業をまとめたもので、その名の通り、ディスカッションではなくディベートのやり方やルールを学ぶが、本書冒頭の「この本の使い方」にもあるように、ディベートを通じて「話し合って決める」スキルを育成することを目的としている。そのため、ディベートの試合よりは、問題点の整理の

仕方、メリット・デメリットの挙げ方、論題の立て方、グループ内での意思決定の仕方、聞き手を考えた意見のまとめ方など、ディスカッションに準ずる活動が説明されているので、示唆するものは多い。他者との共存、相互理解の大切さなども強調されている。

《日本語口頭表現能力伸長型》

5. 『中級 日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』（2012, 黒崎典子編著）

日本語中級を対象とした会話授業用のテキストで、前半はスピーチに当てられている。大学で必要となる、公の場でまとめた内容のことを話したり議論したりする経験を補填することを狙いとし、専門分野の研究に役立つ口頭表現や、応用力ある口頭表現を身につけること、また、クラス活動やペアワークの実施を通じての聴き手とのインターアクションも重視している。ディスカッションは後ろの2課で2つのタイプを扱っている。まずU5「日本のいいところ、よくないところ」では、意見交換が主目的で、調べた事を無原稿で発表し、そのあと意見のやりとりをする。ここでディスカッションの流れと表現を学び、自分の意見を即時に言ったり、質問に対応することを学ぶ。U6「美容整形 賛成？反対？」は、ディベート型ディスカッションとしており、特に有用なのは、ディスカッションのだいたいの流れが学べること、意見と理由を言う／質問をする／質問に答える／反対する点を探り上げて意見を言う／反論するなどの表現が学べる点である。また、司会の言葉のモデル文と、最後にディスカッションのモデル文も所収されている。難点は、事前作業が多く、ディスカッション本番に挑むまで15頁程度を割く反面、ディスカッション実施は1ページ程度（「振り返り」も少し有り）と物足りないことである。

6. 『もっと中級 日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』（2013, 黒崎典子編著）

5（『中級 日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』）の続編、中上級対象。全体の構成は5とほぼ同じで、前半でスピーチ、後ろの2課でディスカッションを学ぶ。語彙や表現、テーマの難易度を上げたもの。U5「大学生の就職活動」で意見交換を中心としたディスカッションを行い、U6「褒めて育てる？叱って育てる？」ではディベート型ディスカッションを行う。有用な点と問題点も、5とほぼ同じである。

7. 『日本語超級話者へのかけはし』（2007, 荻原稚佳子他著）

日本語上級を超級へ押し上げる橋渡しの会話テキスト。上級の欠点（自分の経験からしか意見が言えない、抽象的な考え方と具体的な事実を織り交ぜて論理的に述べられない、話題にふさわしい語彙や慣用語が使えず周りくどい、場面や相手に応じて話し方が変えられない）を克服するのが狙いで、ACTFL-OPIの言語運用能力基準を参考にしている。5, 6同様、前半はスピーチに当てられ、後半の第9課「働くことの意義について討論しよう」第10課「環境問題について話そう」第12課「マスコミの功罪について議論しよう」（第11課「犯罪

傾向から現代社会を語ろう」は発表が主体)でディスカッションを扱う。本番に挑む前に「何をどんな順序で／どんな言葉で／やってみよう」というパートがあり、そのテーマで利用される機会が多いと思われる語彙や慣用句、表現を学べるのが特徴で、ここはかなり紙幅が割かれている。事前に「話すためのメモ」を作成したり、問題点を挙げる際の短文を作成するなど、準備ができるのは有用である。ディスカッションの具体的な進め方についてはほとんど説明が無く、日本語表現は「意見の述べ方」「反論の仕方」が扱われているが、他の機能的表現については言及が無い。

8. 『日本語 口頭発表と討論の技術 コミュニケーション・ディベート・スピーチのために』(1995, 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会著)

大学留学生を対象としており、ディスカッションを扱った第11章は、本稿が目指す内容に最も近い。第11章「討論の練習」では、討論参加の心構えと討論の流れについて述べられ、司会者などの役割についても説明がある。短いスピーチとそれについての質疑応答、意見交換、役割交替をしながら小討論を繰り返すなど、練習用のパターンが豊富で、ディスカッションの経験を積むことができる。特徴は、「本格的な討論」のために、討論のやり方よりも、論点の明確化と論証・論駁の方法を習得し、論理的思考力の育成を重視している点である。特に有用なのは、討議者用に「自説を述べる／賛成・反対を表明する／限定する／いったん認めてから反論する／発言の許可を求める／口を挟む／話を元に戻す／相手の発言を確認する／相手の発言と自分の意見を関連付ける／註釈する」など、また、司会者用に「発言を促す／発言の意図を確認する」など、機能的な日本語表現がリストで多数紹介されていることである。難点としては、文字による説明が多く、感覚的に理解しにくいこと、また、討論に臨む心がけや注意点、議論の流れは説明されているが、具体的な進め方は示されていないことである。しかし、他の日本語会話用テキストとは一線を画すものがあり、大学留学生が学ぶディスカッション用のテキストにとっては、参考になる部分が非常に多い。

9. 『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーション プレゼンテーションとライティング』(2012, 大島弥生他著)

ディスカッションを扱った部分はないが、自己PRやブック・トークなどを行う過程で質疑応答や意見交換をするようになっている。本テキストの狙いが大学生の双方向的な学び方(ピアラーニングによる相互リソース化)であり、適宜、設けられる「話し合い」は、そのための活動として位置づけられている。意見の矛盾、客観性、論理性などを学生同士が検討し合って、自らの学びの糧にすることが目的である。日本人大学生と留学生を対象としており、留学生のために、各課で必要となる日本語表現(「意見を確認する」など)が挙げられている。ディスカッションについては全く学べないが、自分の意見に説得力を持たせるために他人からフィードバックをもらおうという視点は、ディスカッションでも生かせるものであ

る。

10. 『新装版 実用ビジネス日本語』（第6版 2013, TOP ランゲージ著）

日本で働く中級レベルを終えた外国人ビジネスマンが対象で、社内の日本人との意思疎通、コミュニケーションを問題無くおこなうための会話能力を磨くことを目的としている。基本的には1対1、または3～4名の参加者を想定した「会話・対話」テキストであり、機能別会話練習を行う形式である。会話文は、巻末に全ての英訳が載っている。後半の第8章「情報伝達」、第9章「意見陳述」、第10章「意見交換」で、提案・仮定・説得・同意・強調・反論・意見の保留など、ディスカッションという形にはなっていないが、会話以上の方略が必要となるやや長めのやり取りが、会話モデルを使って学べるようになっている。また、各課に「戦略表現」として「反論の前置き」など、ワンフレーズ程度の日本語表現が挙げられているのも有用である。本格的なディスカッションには遠いが、どのタイミングでどのような日本語表現を使えば単なる会話・対話以上のやり取りに踏み込めるか、端的なことは学べる。

2.2 分析のまとめ

以上の結果を見ると、今回分析した10冊のテキストは、まさに一長一短であり、「ディスカッションの意義や基本的な進め方」と「適切な日本語表現」の両方が同時に、かつ十分に学ぶことができるテキストは無い。《人材育成型》は、著者の人材育成に対する理念に基づいて編纂されている傾向があり、ディスカッションの技術を習得するというよりは、ディスカッションの準備や振り返りの過程などを含む一連の活動を通じて、参加者の内面的成長を促すものであると言える。そのために、テキストの中身、構成もやや複雑である。さらに、このタイプのテキストは留学生を対象に想定していないので、当然ながら、討論で使われる日本語表現を学べるかたちにはなっていない。《話し合いの基礎習得型》は、今回一冊しかみていないが、事情は同じであると言える。これに対して《日本語口頭表現能力伸長型》は、日本語で考える力、日本語で話す力を伸ばすことが主眼であり、ディスカッションの意義や基本的な進め方、その具体的な方法については大まかな説明があるか、全く言及がないかである。また、学べる日本語表現が「意見と理由を言う」「質問をする」「反論する」「同意する」など、談話機能的な域を出ておらず限定的なのは、この種のテキストの大きな問題であると言わざるを得ない。充実したディスカッションは、「合意に至るまでの柔軟で協力的なプロセス」を経るものと1.1節で確認したが、果たしてこのように限定的な表現で対応できるだろうか。議論を「進める・深める」ために使う日本語が必要となるのではないか。唯一、この点で充実していたのは、8. 『日本語 口頭発表と討論の技術 コミュニケーション・ディベート・スピーチのために』である。

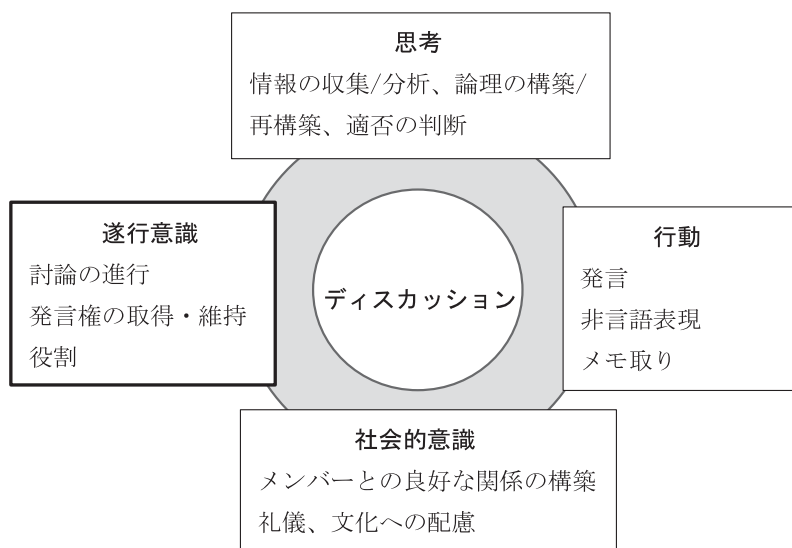
以上のテキスト分析を通じ、改めて認識するに至ったことは、ディスカッションが広範な

認知領域に跨るきわめてダイナミックかつ高度な言語活動であり、複合的な要素から成り立っているということである。そこで次章では、まずディスカッションを成立させている要素を抽出したうえで、目的とするテキストの基本方針に含まれるべきこと、すなわち大学留学生がディスカッションで何を行い、何を学ぶべきなのかを検討していくこととしたい。

3. 大学留学生のディスカッションテキストに求められること

3.1 ディスカッションを成立させる要素

第1章で、Barnlund & Haiman (1960)、中澤他 (2007) を参考に、本稿では大学留学生がおこなうディスカッションの基本概念を「柔軟で協力的なプロセスを経て、共通の理解を獲得し、共通の解決策に到達するという目的をもった話し合い」とした。それでは、ディスカッションの参加者はこれを実施するにあたってどのようなことを行わなければならないのか。筆者が Barnlund & Haiman (1960)、および今回の分析対象とした10冊のテキストをあわせて考察したところ、ディスカッションを成立させているいくつかの要素があることが見えてきた。それは、「思考」「行動」「社会的意識」「遂行意識」の四つである。ディスカッションは、これら四つの要素が互いに関与し合い、連動しながら行われると考えられる〔図1〕。



〔図1〕 ディスカッションを成立させる4つの要素（筆者作成）

「思考」はテーマの理解、必要な情報の収集と分析、論理の構築、妥当性の判断など、考えたり判断したりする一連の思考活動である。「行動」は、言語による発言と、非言語による態度の表明（声の大きさ・話す速さ・声の調子、表情、相づち、アイコンタクトを含む）である。途中でメモを取ることもここに入るであろう。「社会的意識」とは、グループ内の人

間関係を良好に保ち、礼儀をもって接する意識、他文化や習慣への配慮といったことである。そして、ディスカッションにおいて最も重要で、強調されるべき要素は「遂行意識」であると考えられる。遂行意識とは、課題を随時、着実にこなしながら目的を達成するという意識のことである。ディスカッションでは、参加者の意見交換が活発かつスムーズに行われ、共通の合意あるいは目的に到達できるよう、参加者自身が主体的に議論をコントロールする意識がこれに当たる。具体的には、適切なタイミングでの発言権の取得・維持、論点がずれそうになった時の対処、互いの意見の確認や整理など、「柔軟で協力的なプロセス」を生み出す意識である。進行役やタイムキーパーに当たっているならば、その役割を果たす意識もここに含まれるだろう。

ディベートは予め準備された内容を、定められた順番と時間制限のもとで発言していくので、参加者自らが議論の流れをコントロールする必要はない。したがって、遂行意識よりも「思考」「行動」に重点が置かれる活動と言える。また、会話・対話はその目的も進め方も自由なので、元よりこのような遂行意識をもって臨む必要はない。しかし、ディスカッションは、参加者自らが「討論を始める・進める・深める・修正する・確認する・まとめる・終える」など一連の過程を経て合意・到達に至る必要があり、グループ内で協力的に行われなければ成立しない。そのため、有意義なディスカッションを行うには、参加者自らが「遂行意識」を強く持つことが不可欠なのである。大学留学生に向けたディスカッションのテキストでは、この点を特に強調しなければならないと考える。参加者が遂行意識を適切に理解していれば、「雑談になる」、「一人が演説し、他の学生は黙っている」、「各々が勝手に話し出したり、遮ったりして議論をコントロールできない」などの諸問題も、おのずと解決することが期待できる。

3.2 ディスカッションで使う日本語表現

留学生に向けたテキストであるならば、もう一点、非常に重要なことがある。それはどのような日本語表現をどの程度扱うか、ということである。ディスカッションは言葉を介して行われるが、その目的の違いから、少なくとも二種類に分けられると考える。一つは「何を述べるか」、すなわち意見やアイデアといった「内容」に使われる言葉である。そしてもう一つは、例えば「ちょっと論点がずれてきましたね」「話を戻しましょう」「確認ですが、それはつまり…ということですか」「その点で、〇〇さんの意見とは異なっていますね」など、個々の意見やアイデアの内容とは別に、議論の現在位置を確認したり、意見を整理したりして、議論の進行や発展に関わり、貢献する言葉である。これには多くの種類がある。これらを仮に「進行言葉」と呼ぶことにしよう。

2.1 節の各テキスト分析で指摘したように、現状の日本語テキストでは、「意見と根拠」など、主として「内容」のための日本語を学ぶことに重点が置かれている。「質問をする」「反論する」「同意する」などが取り上げられている場合もあるが、これらだけでは遂行意識に

基づいたディスカッションで十分な対応ができないのは明らかである。参加者自らが議論をコントロールしなければならないディスカッションでは、進行言葉が非常に重要となる。にもかかわらず、現状では進行言葉を学ぶ機会は殆ど無く、かなり軽視されていると言わざるを得ない。遂行意識に伴って駆使されるべき種々の日本語表現が使われないまま、充実したディスカッションが行えるとは到底、思われない。意見や反論の「内容」で使う日本語は、大学留学生のレベルであればある程度、自らの力で使いこなすことができる。しかし、進行言葉は、それほど難しいものではなく、決まった形の短いフレーズがほとんどであるにもかかわらず、かなり日本語に慣れた学習者でも、ディスカッションの中で適切に使うことができない、あるいは知らない場合が少なくない。

こうした現状を踏まえると、留学生に向けたディスカッションテキストは、進行言葉が効率よく身につけられるようにする必要がある。多くの進行言葉を身につけることは、留学生が能動的にディスカッションに参加する大きな動機付けとなるはずである。

4. まとめ

以上、大学留学生に向けたディスカッションテキストはどうあるべきかを検討してきた。まず、10冊のテキストを分析した結果、現状では大学留学生が「ディスカッションの意義と基本的な進め方」と、それに付随する「適切な日本語表現」が同時に学べる妥当なテキストが無いことを明らかにした。この事実を踏まえ、大学留学生が行うディスカッションの捉え方を基本的な視座から問い直し、そのうえで、ディスカッションに必要となる四つの要素を抽出した。ここで強調したのは、ディスカッションには「遂行意識」が求められるということである。そして、留学生が積極的に身に付けるべき日本語表現は、従来のように意見やアイデアの内容を充実させるための日本語もさることながら、ディスカッションが「柔軟で協力的なプロセス」を経て合意・到達できるように、議論をコントロールする「進行言葉」であることを述べた。以上を踏まえて本稿が主張するのは、大学留学生に向けたディスカッションテキストの基本方針に以下の三点を据えることである。

- ①ディスカッションの基本概念を正しく認識させること。
- ②ディスカッションは「遂行意識」に基づいて行われることを理解させること。
- ③充実したディスカッションのために、「進行言葉」を効率よく身に付けさせること。

勿論、これらは従来のディスカッションテキストの方針を否定するものでは決してない。ディスカッションはコミュニケーション能力を伸ばすための活動であるという従来の見方と何ら異なるところはなく、①～③はむしろそれを、さらに学びやすくするための補完的意味を持つ。さらに、論理的思考力を鍛えること、日本語で言いたいこと（内容面で）を正確に述べる力を併せて重視することは、これまでのテキストと全同である。ただ、これまでのテキ

ストでは①～③の視座を欠いていたため、ディスカッションで留学生が何をすべきで、何をすべきでないのか、そのためにどうすればよいのかが、留学生に分かりやすいかたちで説明されてこなかった。また、それゆえにテキストによって重点が置かれている活動が異なり、構成に偏りがあること、討論に必要な日本語表現の扱いが不十分であることなど、問題が少なくなかった。したがって、ここで新たに、大学留学生が学ぶテキストに相応しい方針として①～③を提示した。

おわりに

本稿では、大学留学生にとって必要なディスカッションテキストの方向性と、含むべき内容については明確に示すことができたが、そのための具体的なタスク、評価方法などについては議論できなかった。今後は、本稿で明らかにしたテキストの方向性に沿うと、具体的にどのような練習が必要となるのか、また、妥当な評価基準と方法についても明らかにしていく必要がある。現在、具体的な練習については既にいくつかの案があり、評価方法は CEFR² の「やり取りの方略」を参照することを検討している。さらに、複雑で高度な言語活動であるディスカッションのテキストは、出来る限り効率よく、無理なく段階的に身に付くような構成でなければならない。こうした全体像についても、今後、検討していきたい。

【註】

- 1) Barnlund & Haiman (1960) によれば、ディスカッションは日常的に様々な場面で行われる行為であり、参加者の属性、関係性や目的によって、合意までのプロセスやアプローチの仕方は異なるという。それを踏まえ、Barnlund & Haiman (1960) はグループ・ディスカッションのタイプを Casual Groups, Cathartic Groups, Learning Groups, Policy-Making Groups, Action Groups の5つに分類している。大学授業での大学生によるディスカッションは、Learning Groups に入ると考えられる。
- 2) CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) は、多文化社会を形成する欧州において考案された言語教育に対する理念の枠組みで、目標言語の熟達度の目安を記述したガイドラインである。2001年に発表されて以来、その枠組みは各言語教育の場において参照されるようになり、日本語では国際交流基金によって2010年に「JF 日本語教育スタンダード」(JF スタンダード)として開発、公開されている。

【分析対象テキスト】

(本稿 2.1 節「表 2」で挙げた順)

1. 『話し合いトレーニング 伝える力・聞く力・問う力を育てる自律型対話入門』(2011) 大塚裕子・森本郁代編著、ナカニシヤ出版。
2. 『大学生からのグループ・ディスカッション入門』(2018) 中野美香著、ナカニシヤ出版。
3. 『知のナビゲーター』(2007) 中澤務・森貴史・本村康哲編、くろしお出版。
4. 『みんなのディベート授業』(2003) 樋口裕子著、日本文教出版。
5. 『中級 日本語で挑戦! スピーチ&ディスカッション』(2012) 黒崎典子編著、石塚久与・高橋純子・二瓶知子・細川美紀著、凡人社。

6. 『もっと中級 日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』（2013）黒崎典子編著，石塚久与・高橋純子著，凡人社.
7. 『日本語超級話者へのかけはし きちんと伝える技術と表現』（2007）荻原稚佳子・齊藤真理子・伊藤とく美著，スリーエーネットワーク.
8. 『日本語 口頭発表と討論の技術 コミュニケーション・ディベート・スピーチのために』（1995）東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編，東海大学出版会.
9. 『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーション プレゼンテーションとライティング』（2012）大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂・池田玲子著，ひつじ書房.
10. 『新装版 実用ビジネス日本語 第6版』（2013）TOP ランゲージ著，アルク.

【参考文献】

- Barnlund, D. C., & Haiman, F. S. (1960) *The dynamics of discussion*. Boston, Massachusetts. Houghton Mifflin.
- 中澤務・森貴史・本村康哲編（2007）『知のナビゲーター』くろしお出版.
- 樋口裕子（2003）『みんなのディベート授業』日本文教出版.
- 福原香織（2019）「日本語上級レベルの討論技術とは－CEFR ガイドラインに照らして－」神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要第4号，pp 45-61.
- 香月裕介・福原香織（2022）「日本語中級レベルにおいて学ぶべきディスカッション技術－「質問する」「同意する」「反論する」を例に－」神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要第7号，pp 63-72.

【参考 URL】

- 国際交流基金「JF スタンダード CEFR Can-do リスト」（レベルごと、カテゴリーごと）
https://jfstandard.jp/pdf/CEFR_Cando_Level_list/pdf（2022 年 6 月 1 日閲覧）
- 文化審議会国語分科会「日本語教育の参照枠 報告」令和 3 年 10 月 12 日報告
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf（2022 年 5 月 1 日閲覧）